

12. 神 社

市内にはおよそ31あり、ここでは開拓使時代からの5つの神社を取り上げました。(室蘭市内の神社および不動尊の祭りの数々...96ページ参照)

絵鞆神社 (絵鞆町)

弘化元年(1845)に、当時の絵鞆場所請負人の岡田半兵衛が、絵鞆に漁場の出張りを設けた際に航海の安全と事業の発展を祈願するため、絵鞆近くの二つの小島に大黒・恵比寿の両神と陸には稻荷大明神の三神を祀ったのに始まるという説があります。これ以降、大黒島、恵比須島と呼ばれるようになりましたが、風当たりが強く社の保持が難しいため僅か1年で崎守神社に遷されました。

明治26年(1893)、現在地に社殿を建設して稻荷大明神を祀り、同30年崎守神社に一時遷座していた大黒・恵比寿両島の神体を同社に合祀(ごうし)しました。祭神は豊漁にちなんだ大国主命(おおくにぬしのみこと)、事代主命(ことしろぬしのみこと)、保食神(うけもちのかみ)です。

室蘭八幡宮 (海岸町)

明治元年(1868)旧暦8月15日に、室蘭群支配総鎮守神社として函館八幡宮より分霊を受けて今の崎守神社に創立し、新室蘭(現 蘭西地域)に町の中心が移ったことにより鎮守様が必要と、明治7年から8年にかけて、崎守町にあった崎守神社を遷座(せんざ)したものです。八幡大神とともに琴平神(ことひらのかみ)と保食神が合祀されています。

当時、神社の造営に当たり市民からの寄付を予定しましたが、思うように集まらなかったため、同年、港にクジラが漂っていたのを漁民が捕獲し、北海道開拓使に買い上げを願い出て、このクジラを売った代価(当時の140円)を造営費用(当時の300円)に充てたことから、別名「鯨八幡」とも呼ばれるようになりました。

開拓使の記録には、このクジラは「目の下丈(たけ)六尋(ひろ)(約10.8m)で胴まわり四尋(ひろ)(約7.2m)あり、左腹背から尾にかけて四分の一が鯨(しゃち)に食いちぎられていた」と記されています。(文化財・鯨神の舞...36ページ参照、文学碑・幸能舎守雄歌碑...45ページ参照)

中嶋神社 (中島町)

中嶋神社の前身は、室蘭屯田兵中隊の屯田兵(開拓と兵務を兼ねた人達)が入植した輪西村(現在の輪西町から本輪西町にかけての広い一帯をいう)鎮守のため、明治23年(1890)、兵村のほぼ中心にあたる翔陽中学校西側の小山(輪西町と東町の間、新日鐵住金球場の裏山)の上に建てた兵村社(やしる)「圓山(まるやま)神社」です。

明治30年(1897)、中隊本部が第七師団司令部(旭川)に吸収移管されたのを機に中隊本部があった中島台(現在地)に移転し、中嶋神社と改称しました。

はたもり 幡守神社 (石川町)

石川邦光を藩主とする仙台伊達藩角田支藩が石川町一帯に開拓団として入植し、石川家の惣神だった幡守神社をその守り神として、明治7年(1874)に建立したといわれています。八幡神社と同じ年に建てられ、明治34年(1901)には、故郷の角田幡守神社から社名公称の許可を得て、室蘭では崎守神社や絵鞆神社に次いで歴史のある神社です。祭典は、農閑期を利用した9月初旬に行われています。

崎守神社 (崎守町)

室蘭発祥の地、崎守町の鎮守である崎守神社は、今から170年ほど前の天保10年(1839)ころに建てられ、市内最古とされています。しかし、一方では、嘉永2年(1849)という説もあり、これが正しいとすると、弘化元年(1844)に建てられた絵鞆神社が市内最古になります。いずれにしても、当時のムロラン(現在の崎守町)は、東蝦夷地の交通の要路として、この地方最大の集落を形成し、多くの人たちの心のよりどころだったのでしょう。

崎守とは防人(さきもり=都から遠く離れた土地を守る)と同じ意味で、南部陣屋の出張台場がこの地にあった明治元年(1868)のころから崎守神社と呼ばれていたようです。